



## 「音訳を続けて24年」

おお たけ ひで こ  
大竹 英子

1931年(昭和6年)  
江戸川区小松川生まれ、  
東小岩在住。



### ■ きっかけは同僚の死

56歳の時でした。地元の会社に勤めていた時にね、一緒に働いていた男の人ですごく真面目な人がいたんですよ。その人がね、残業していたら急に具合が悪くなったというので、病院に連れて行ったけれど翌朝亡くなってしまったんですよ。40歳代とまだ若かったけれど、過労死だったんでしょうかね。

わたし、すごくショックを受けて。これはね、いくら仕事が好きでも明日何があるか分からないって思ったの。それで「好きな文学と旅行、それから何か人さまのお役にたてること、この3つをしよう」と思いきって仕事を辞めたんです。

1つ目の希望を叶えるため、小松川図書館に行き「読書会のようなものはありませんか」と聞いたところ「朗読ボランティア百舌の会(百舌の会)」を紹介されました。そこで視覚障害の方のために朗読する会に出合ったんです。同じころ、万葉集の勉強会「青い実読書サークル」というのがありましたのでここにも入りました。

それから、3つ目の希望を叶えるため、区のボランティアセンターに電話して登録をしました。「視覚障害者の会」の方の通院や会合などに付き添うお仕事をくださって、こちらでも視覚障害の方とお付き合いさせていただくことになったんです。70歳ぐらゐまで続けたでしょうかね。

### ■ 音訳の魅力

「百舌の会」は昭和56年、区のボランティア協会主催の「朗読ボランティア養成講習会」を修了した18名の方々が、その後も勉強を続けようと立ち上げたんですね。「百舌の会」という名称は、たくさん声を届けようという思いでつけたそうです。

わたしが入会した時は「朗読ボランティア百舌の会」という名称でした。依頼者の「あるがままを伝えてほしい」という要望で、徐々に芸術的な読み方から視覚情報を分かりやすくシンプルに音声で伝えていくようになってきました。それで平成9年3月に「音訳百舌の会」という現在の名称に変わり、今年で創立30周年になるんですね。

音訳を利用する方は、病気あるいは事故で、後天的に

目が悪くなった中高年以上の方がほとんどです。「広報えどがわ」、本、雑誌、新聞などを読んで、カセットテープやCDでお届けするんです。依頼者の方たちの目の不自由なところをお手伝いする、という気持ちで活動をしています。

わたしが「百舌の会」に入ったころは、テープ録音しかなかったので、けっこう苦労しましたね。余計なことを読んでしまった時は、前後をゆっくり読み直して帳尻を合わせたり、読み忘れをしたら、前後を早めてそこに入れたりするんです。でも最近は録音機もデジタル化され調整がすごく楽になりました。

録音をする前には「アエイウエオアオ～ラレリルレロロ」と、だんだん声を大きくしていく発声練習をしてから始めます。わたしの場合、1冊を音訳するのに5、6時間、ものによっては20時間かかります。それから校正するんです。自分ではちゃんと読んでいるつもりでも、間違いがあるんですよ。

24年も続けてこられたのは音訳の魅力ですね。音訳を頼まれて雑誌や本を読むことで、自分も新しい知識が得られます。わたしは、読むことも調べることも楽しいし好きです。調べるといういろいろ解り、考えますよね。考えることも好きです。分からない言葉は、辞書、百科事典やインターネットでも調べますよ。パソコンは息子が教えてくれました。

それから、何よりも依頼者の方が喜んでくれますしね。視覚障害者の会合で話をすると、声でわたしだと判ってくださって。依頼者のなかには指名してくれる人たちもいて、それがまたうれしいですね。短歌を詠まれたり歌集を出していらっしゃる方もいて、歌集の朗読を頼まれたりします。その時は作者の気持ちを想像して読みます。

あとは何と言っても「百舌の会」の仲間ですね。心温かい人が多く、人間関係が良いんですね。好きなことが同じというのは、気持ちが触れ合いますものね。「百舌の会」でも私よりベテランの方はたくさんいますが、年齢はわたしが高いほうですね。若い方と接する機会もあって、さまざまな年代の方の考え方や、良さとお会いするのがうれしいですね。教えていただくことも多いです。

わたしは本が好きなので新聞の書評を参考に、図書館でいつも3、4冊は借りてきます。好きな作家は向田邦

子で文章がうまいなと思います。好きな作家の本を読むと、また音訳をやるとういう気持ちになりますね。ですから音訳に疲れると本を読んで、また音訳をします。

お芝居も好きで、若いころはひとりでよく民芸や俳優座などを観に行きました。芝居を観ているといつの間にかもろもろの知識が染み込んでくるので、朗読の勉強になるんですね。映画も観たわね。お給料も大分それらに注ぎ込んでね。



◆音訳をデジタル録音する大竹さん

## 戦争と父の影響

わたしが生まれたのは昭和6年満州事変の年で、日中戦争の始まる昭和12年に南葛飾郡小松川町（現江戸川区小松川）の小松川第二尋常小学校に入学しました。4年生の時に太平洋戦争が始まったでしょ。ですから、わたしたちの子ども時代はずっと戦争でしたね。

昭和18年、東京府立第七高等女学校（現都立小松川高等学校）に上がったの。始めのうちは勉強したけれど、しばらくすると、毎日ちょっと勉強してあとは兵器の部品を作っていました。あのころは、登校するのにも4列縦隊で行進してね、校門の前で直角に曲がって入りましたものね。今考えるとすごい時代だったと思いますよ、ほんとうに。

だんだん空襲が激しくなり2年生の3月に、学童疎開ではなく知人の紹介で疎開したんです。わたしは、母と2人の妹と一緒に秩父鉄道に乗り、埼玉県秩父の皆野というところに行きました。親戚があつて行ったわけではなく知人もいないので、食べ物にはずいぶん困りジャガイモが主食でしたね。

家具やお鍋とかを疎開先に運べなかったんですね。母が胃弱で病がちでしたから、長女のわたしが小松川の家までお鍋を取りに行ったんです。熊谷経由で秩父の家に帰るのに電車がなくなって、上野駅で女学生なのにひとりで一晩明かしたことがありました。

転校した秩父高等女学校では、兵器部品を作るような学徒動員がありませんでしたから、みなさん結構勉強をしていましたよ。勉強は東京の方が進んでいると思っていたけれど、秩父の方が進んでいましたね。

昭和20年3月10日は、秩父から東京の方角を見ると山の向こうの空が真っ赤で、土地の人から「東京は大空襲だよ」っ

て言われたのを覚えているわね。この日、わたしの住んでいた小松川の家も父の鉄工所も焼けてしまいました。父は燃え盛る炎の中を逃げのびて、秩父まで歩いて来たんですよ。やっとどり着いた父の目は真っ赤で、しばらく寝込んでしまいました。

父は仕事が好きで、なんに対しても一所懸命な人でした。文学のことから生活の知恵までいろいろ教えてくれました。伯父が主宰していた俳句の会に参加していて、自分の書いたものを読んでも「分かるか」と聞くんです。昔は電熱器で煮炊きをしていましたが、ニクロム線が切れて、父が繋ぎ方を教えてくれたことを覚えています。わたしは仕事も文学も好きだから、どっちかというと父に似ているんでしょうね。

## 息子夫婦の協力で

今は息子夫婦と3人で暮らしていますが、お嫁さんは犬が飼いたいのに我慢してくれて、夕食後は夫婦で2階に上がってくれるんです。ですから静かに好きな音訳に打ち込めます。

わたしは戦時中に一汁一菜で育ちましたからそれで良いのですが、息子夫婦はそんなものを食べていたら栄養不足だと思われ、わたしには作らせません。眠れない時は、夜中に起きて本を読んだりしても何も言わず、好きなようにさせてくれるので助かります。息子夫婦の協力がなければ、音訳は続けられないですね。

会社を辞める時に2つ目の希望だった旅行も随分楽しみましたよ。わたし、ヨーロッパが好きでね。特にドイツは、ゲートが好きだったので3回行きましたよ。でも、最近は身体がね。だから遠くへは行けなくなりました。帰りも、夕方は5時前に東京駅に着かないとだめって、息子が言うもので。

今、80歳でしょう。この1年で目も耳も声も衰えてきてね。この前読んだ文庫本の斎藤茂吉「日本の詩歌」などは、文字が小さいうえに脚注もあつて時間がかかり難儀しましたね。もしものことがあつて録音が途中になってしまつては、依頼してくださつた方にも悪いですからね。健康と体力維持に気をつけて1日6千歩ぐらいは歩くようにしています。

図書館で偶然「百舌の会」を紹介されて入りましたが、結果的にとても良かったと思っています。最近は短歌の読み方について分からないという方の相談にのったり、人さまの読んだものを校正させていただいたりしているのですが、これが楽しいですね。

楽しいことにたどりつけて、張り合いのある毎日を過ごせて幸せだなと思います。24年前のあの時、思いきって仕事を辞めて良かったと思っています。

